

重要カレイ類の資源評価と管理技術に関する研究

(資源評価調査)

寺門弘悦・吉田太輔

1. 研究目的

本県底びき網漁業の重要な漁獲対象であるムシガレイ、ソウハチおよびアカガレイに、新たに資源評価対象種となったヤナギムシガレイを加えた4種を重要カレイ類とし、それらの資源状況について科学的評価を行うとともに、資源の適切な保全と合理的かつ持続的利用を図るための提言を行うことを目的とする。

2. 研究方法

漁獲統計資料は島根県漁獲管理情報処理システムにより抽出し、魚種別銘柄別漁獲量の集計を行った。また、産地市場での漁獲物の体長測定を実施し、調査当日の漁獲物の体長組成を推定するとともに、適宜、漁獲物を買取り、精密測定を実施した。さらに、これらの調査結果をもとに(国研)水産研究・教育機構 水産資源研究所(以下、水産機構水資研)および関係各府県の水産研究機関と協力し、魚種別の資源評価を行った。

3. 研究結果

(1) 重要カレイ類の漁獲状況調査

重要カレイ類について、漁業種類別漁獲量を集計した。ムシガレイおよびソウハチについては浜田漁港を基地とする沖合底びき網漁業(2 そうびき)(以下、沖底)で漁獲された銘柄別漁獲量を集計した。

(2) 生物情報収集調査

2020年漁期中に浜田市場において、沖底で漁獲されたムシガレイおよびソウハチの市場調査をそれぞれ3回実施した(うち各1回は精密測定も実施)。また、アカガレイを主体に漁獲していた沖底船の廃業により中断していたアカガレイの市場調査は、大田市場の小型底びき網漁業の漁獲物を対象として再開し、2020年漁期中に2回実施した(うち1回は精密測定も実施)。

図1に浜田、恵曇漁港を基地とする沖底における重要カレイ類4種の1統当たり漁獲量の推移を示した(ただし、2019年漁期以降は恵曇船が廃業したため浜田船のみ)。2020年漁期の漁獲量は、ソウハチが178トン、ムシガレイが149トン、ア

カガレイが0.2トン、ヤナギムシガレイが42トンであった。また1統当たり漁獲量は、ソウハチが44トン、ムシガレイが37トン、アカガレイが0.1トン、ヤナギムシガレイが11トンであり、平年比(2010年~2019年の過去10年)ではソウハチは112%、ムシガレイは62%、アカガレイは0.2%、ヤナギムシガレイは72%であった。アカガレイを主体に漁獲していた沖底船の廃業により、本種の漁獲量は2019年漁期以降大幅に減少した。

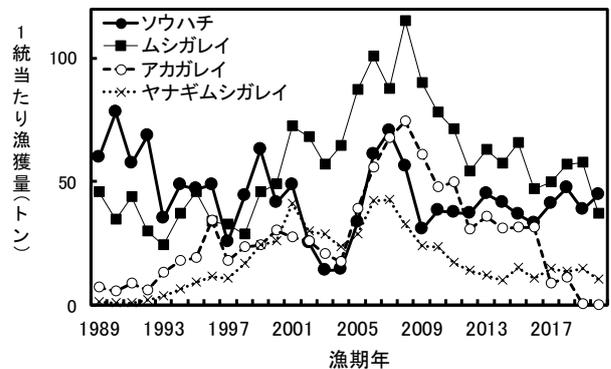


図1 浜田・恵曇漁港を基地とする沖合底びき網漁業(2 そうびき)で漁獲された重要カレイ類の漁獲動向(2018年漁期以降は浜田船団のみ)

4. 研究成果

調査結果は水産機構水資研に送付し、重要カレイ類の日本海系群の資源評価に活用された。また、水産機構水資研が開催するブロック資源評価会議において資源管理方策の提言が行われた。